日本文学研究資料叢書

平安朝日記

Ⅱ

有精堂

日本文学研究資料叢書

平安朝日記 II

和泉式部日記・更級日記
讃岐典侍日記

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

平安朝日記 II

昭和 50 年 11 月 20 日　発　行

編　者　日本文学研究資料刊行会

発行者　有精堂出版株式会社
代表者　山　崎　　誠

発行所　有精堂出版株式会社
東京都千代田区神田神保町 1 —39
電話　03 (291) 1521～3 番
振替口座　東京　4 0 6 8 4
郵 便 番 号　　1 0 1

山之内印刷　　3393—550646—8610

目次

和泉式部日記

和泉式部の文学……清水文雄……一
和泉式部物語……今井卓爾……二
「和泉式部日記」の作者について……織田裕子……一九
作者と成立年代……山岸徳平……三一
和泉式部日記における奥書の問題……鈴木知太郎……三九
―健寿御前日記の奥書との関連において―
和泉式部と和泉式部日記……藤岡忠美……四六
和泉式部日記三系統本の性格　序説……森田兼吉……五五
原和泉式部集の想定―日記成立に関する仮説―……伊藤博……六三
原和泉式部集の原型と日記の作者―夫木抄を中心として―……山田清市……七一
和泉式部日記の特色……五十嵐力……八一
和泉式部日記の特質……木村正中……八三
『和泉式部日記』の一考察―矛盾面からうかがえる基本構造―……鈴木一雄……九二

和泉式部日記における矛盾面解明への一試論……吉田幸一…一〇八
作品形象の追体験 ― 新講和泉式部物語 ― ……遠藤嘉基…一一八
和泉式部考……上村悦子…一三〇
和泉式部の出家……大橋清秀…一四二
『和泉式部日記』と「宇治十帖」……岡一男…一五五

更級日記

更級日記 ― 夢幻思慕の果て ― ……阿部秋生…一五八
孝標女に関する試論 ― 主としてその中年期をめぐって ― ……犬養廉…一六三
更級日記の再吟味 ― その宗教意識について ― ……近藤一一…一七二
更級日記についての小見……秋山虔…一八〇
物語作者としての孝標女……鈴木一雄…一八五
更級日記臆断……犬養廉…一九一
更級日記構想論……近藤一一…二〇二
更級日記の構造……杉谷寿郎…二一三
更級日記……野村精一…二二一
更級日記と夢ノート……永井義憲…二三〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

讃岐典侍日記

讃岐典侍日記の主題性 …… 佐山　済 …… 三六
讃岐典侍日記 ― 平安女流日記研究の問題点とその整理 ― …… 今井源衛 …… 二四
讃岐典侍日記の成立 …… 森田兼吉 …… 二五八
讃岐典侍日記 …… 石埜敬子 …… 二六四
讃岐典侍日記についての小論 …… 宮崎荘平 …… 二六九
讃岐典侍の性格 ― 『讃岐典侍日記』と『長秋記』― …… 松本寧至 …… 二七九
堀河帝の後宮 ― 讃岐典侍日記形成の背景 ― …… 守屋省吾 …… 二九一
日記文学執筆の一契機 ― 死と回想 ― …… 石原昭平 …… 三〇四

＊

解　説 …… 石原昭平 …… 三一四

和泉式部の文学

清水文雄

一

寺田透氏の作家論集に『理智と情念』という、上・下二冊になった本がある。この本に取り上げられた作家はほとんどが近代作家であるが、一人だけ例外がある。下巻の最後に収められた和泉式部に関するエッセイがそれである。エッセイは二篇あり、その一つは「和泉式部論」、もう一つは「『和泉式部日記』序」と題するもので、二つともすでに発表されたものの再録であるが、和泉式部に対する深い愛情に貫かれ、また鋭い洞察にみちた評論で、啓発されるところの多いものである。

その寺田氏が、最近また「和泉式部の歌集と日記」という文章を、雑誌『展望』の復刊号に書いている。その書き出しはつぎのようになっている。

本当は誰にしてもさうかも知れないが、殊に和泉式部は、語るのに何度でもはじめからやり直さなければならない。もう語りつくしたといふ感じもあるのだが、その要約を作つて和泉を語つたことにしようといふのは許されぬことと感じられる。

ここにいわれていることは、今「和泉式部の文学」というような大それた題目を掲げて、和泉式部の文学について何かを語ろうとしている私にも、身にしみて感ずることである。寺田氏が「何度でもはじめからやり直さなければならない」といい、また「要約を作つて和泉を語つたことにしようといふのは許されぬ」といっていることも、私なりに納得がいくように思う。

寺田氏のいわれたことが、和泉式部の場合とくに強く感じられるというのは、いったいどこに原因があるのだろうか。それにはいろいろのことが考えられると思う。たとえば、和泉式部がその生涯に交渉を持った人は、歌集の詞書のなかから拾ってみても、相当な数にのぼるわけであるが、それらの人々との人間関係を問題にしようとすると、和泉の生きた十世紀末から十一世紀へかけての複雑な政治事情や社会状勢などが頭をもたげてきて、それらを解きほぐさねばさきへ進めぬ、ということになる。しかし、それだけならば、他の作家を対象とする場合も大同小異といってよいのであるが、和泉式部の場合、けっきょく突きあたるところは、「愛」の問題である。もう少し具体的にいうと、「愛」と「その表現」の問題である。和

泉式部が今日もなお繰り返し語るに価する根拠は、ひとえに「愛」の純粋性と、「その表現」の特異性にあると思われる。しかも、和泉自身が恋愛歌人といわれ、またその日記が恋愛日記とも評されているように、その「愛」は、異性間の「愛」、つまり恋愛に大きく重みのかかった意味でいっていることはいうまでもないが、娘の小式部内侍の死に際して示された母性愛なども広く含めた意味である。「愛」の純粋性といったのは、和泉の愛が、情念としての純粋度のきわめて高いことをさしたのであるが、そういう愛の実態を捉える方法は、和泉の書きのこした歌や文章による以外にはない。さきに「その表現」という言い方をしたのも、この意味である。

文章の方はひとまずおいて、その歌をみると、非常に難解なものが、秀歌とよばれるもののなかにも多いのである。その難解さはどこからきているかということについては、おいおいふれてゆくつもりであるが、その前に、もう一度、それについての寺田氏の意見を聴いてみることにする。数首の歌をひっくるめての批評であるが、こんな風にいっている。

これらが示してゐるのは、精神の認識や判断とは別個に生き、それを無視して横暴にふるまふ肉体の記憶といふものを、生々しく、それを客観的描写の対象としてでなく、自身それにとりつかれ、それに苦しまされ同時に酔はされて歌った歌人の苦痛な陶酔と昂揚であり、このやうに歌ひえた歌人は、千何百年のあひだに絶無にして僅有といってさしつかへないだらう。

（『和泉式部日記』序）

たいへん曲折の多い、一見難解な文章であるが、よく読めばさすがに筋はちゃんと通っている。そして和泉の本質を鋭くついた文章である。こういう文体でなければ言い表わしえないものが、和泉の側にあるともいえる。紫式部日記で、和泉を批評した文章のなかに、「歌のことわり」の点が劣っていることをいい、「口にまかせたること」のなかにむしろ目を引くものがあるといったのは、要点においては、寺田氏の意見と一致していることがわかる。

さて、和泉式部歌集をみると、和泉の心の姿がおのずからに表われた、単純な抒情も無論見られるけれども、それとともに、自分の心の姿を、もう一人の自分が見て歌った歌、たとえばつぎのような歌が目につく。

播磨のひじりのおもとに結縁のためにきこえし

くらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山のはの月　（一五一）

正集に見える歌であるが、同じ歌が、拾遺集には「性空上人の許によみてつかはしける」という詞書ではいっており、作者名が「雅致女式部」となっている。父の「雅致」の名をその上におき、おそらくその父の、ある時期の官名から取ったと思われる「式部」という呼び名が用いられている。その点から推測すると、和泉守橘道貞と結婚する前の作であることがわかる。つぎの勅撰集の後拾遺集には、和泉の歌が六十七首も採られているのに、拾遺集にはこの一首がはいっているだけである。このことからも、この歌が和泉の少女時代の作であることはまちがいないものと思われる。この歌は、法華経の一句、「従レ冥入二於冥一、永未レ聞二仏名一」を翻案したものといわれ、そのことを理由にして、同時代の藤原公任は、この歌に好意を示さなかったが（『俊頼髄脳』）、のちの『長明無名抄』では、和泉の秀歌を選ぶとなると、「はるかに照らせ」という歌をまず挙げるべきだとして、「タトヘバ、道ノホトリニテ、ナホザリニミツケタリトモ、コガネハタカラナルベシ」と高く評価している。たとい

法華経の一句の翻案であるとしても、単なる観念的な作りかえでなく、みずからの運命を、はやくも少女の日に予見していたことを思わせるような歌である。情念の闇から闇へさまよいゆくであろうみずからの心の姿を、はっきりと目の前に見ているばかりでなく、いつかはそれが真如の光に照らされる有様までも、願望として描き出している。少女の日に、自分の未来の姿をすっかり見てしまうというのは、恐ろしいことであるが、ともかく、和泉はみずから予見したとおりの運命をたどったようである。それとともに、ユニークな和泉式部の文学の原型が、ここに見られるような気がする。

同じく正集に、つぎの歌が見える。

なげく事ありときき、人の「いかなる事ぞ」といひたるに

ともかくもいはばなべてになりぬべしねに泣きてこそみせまほしけれ　（一六二）

みずからの内部にひしめく情念をもてあまし、表現を断念した所に辛うじて成り立っているような歌である。ことばで表わそうとすると、どのようなことばを用いても、けっきょくは実感から遊離した、通り一遍の表現になってしまう。ことばの機能の極限にきて、そのことばを捨てた和泉は、「ねに泣きてこそみせまほしけれ」と、惑乱する姿態そのままを見せることによってしか、思いの展かれようはないとする。そういいながらも、それがおのずからに一首の歌となっているという、不思議な歌である。ここでは、ことばによって伝達される観念よりも、姿態の具体的なイメージの方が、さきに読者の心を捉える。和泉の秀歌の一つであるが、このような、いわば肉体そのものをもって描く文学が、はやく十一世紀の初頭に現われたことに、注目したいと思う。

さらに、帥宮や小式部など、最愛の人を死によって奪われたのちの、寺田氏の用語によると、「空虚を実体として思ひ知った」（「和泉式部の歌集と日記」）歌、それをたとえば、続集に収められた帥宮追慕の歌群のなかから、任意抄出してみることにする。

しはすの晦の夜

なき人のくる夜ときけど君もなしわがすむ里や魂なきの里　（九四三）

七日、雪のいみじうふるに、つれづれとおぼゆれば

君をまたかくみてしがなはかなくてこぞは消えにし雪も降るめり　（九四七）

三月、つれづれなる人のもとに、あはれなる御事などいひて

すがの根のながき春日もあるものをみじかかりける君ぞ悲しき　（九四八）

なほ尼にやなりなましと思ひたつにも

すてはてんと思ふさへこそ悲しけれ君になれにし我が身と思へば　（九五三）

かたらひしこゑぞ恋しき俤はありしそながら物もいはねば　（九五六）

月日のはかなうすぐるをおもふに

すくすくと過ぐる月日のをしきかな君がありへしかたぞと思ふに　（九七三）

ならはぬさとのつれづれなるに

身よりかく涙はいかがながるべき海てふ海は潮やひぬらむ　（九七七）

出家をひたすらに思ひつづけながら、辛うじて踏みとどまった所で詠まれたと思われるこれらの歌を前にすると、喪ったものがいかにかけがえのないものであったかということを、身をもって確認し

た趣が見える。さきに寺田氏の用語を借りて、「空虚を実体として思ひ知った」歌といったのは、このような歌をさしたわけである。

そのことを、二三の実作について具体的に吟味してみることにする。

「すてはてんと」の歌は、「なほ尼にやなりなましと思ひた」った時の歌であるが、「すてはてんと」した瞬間、捨てるべき「我が身」が、すでに「我が身」でなくなっていることに、はっと気づくのである。空しく消えていった人と思っていた「君」が、「我が身」とともに現に生きていることを、肉体の記憶のなかにたしかめ、新しい悲しみがまたこみ上げてくるというのである。

「すくすくと」の歌では、はかなく過ぎゆく「月日」を、うつろな心で送っているうちに、その「月日」が、「君がありへし方」へ過ぎゆくのだと気づいた瞬間、それを哀惜する思いが突如としてわきおこってくる。それは、理性や分別とは無縁の場所で、情念だけが、何かのきっかけでふと目ざめてくる状況を、和泉式部独自の手法で捉えたものと思われる。

もう一首、最後の「身よりかく」の歌にあたってみることにする。この歌からすぐに連想されるのは、古事記上巻に見える須佐之男命の哭泣の神話である。命は、父神伊邪那伎命に委任された海原を治めようとはしないで、激しく泣くのであるが、その泣く様は、「青山は枯山の如く泣き枯らし、河海は悉に泣き乾」すほどであった。ここの解釈は、本居宣長以来手こずっているようであるが、保田与重郎氏の近著『現代畸人伝』のなかで、日本古来の「涙河」の発想に関する興味ある文章を読んで、眼を開かれたのである。それによると、須佐之男命の涙が、青山を泣き枯らし、河海を泣き乾したというのは、自然の水気が人の体内を通って、その瞳からあふれ出るという、古い日本人の考え方にもとづくもので、それが「涙河」であるという。「涙河」の水量が増し、瞳をついてあふれ出る量が多ければ多いほど、海や河の水という水、土中の水気という水気を乾しつくし、そのために、草木は枯死してしまうと信じられた。「涙河」は、歌語としても、平安時代の歌に頻繁に出てくるが、帥宮追慕の歌群のなかにも、この語を含む歌が見える。「ならはぬ里のつれづれ」にまかせて詠まれたという「身よりかく」の歌は、そのなかに「涙河」の語は含まないが、まさしく同じ発想に従ったものと思われる。こんなにわが身から涙があふれ出ていると、海という海の水はすっかり干上ってしまうだろう、そうすると、はては涙の流れようがなくなるのでないか、という意味である。

以上見てきたように、和泉式部の「愛」そのものが、情念としての純粋度のきわめて高いものであることは、歌を通して推測できるが、ぎゃくにいえば、そうであるがゆえに、その「愛」が、自己表出の正確を求めて、おのずからに難解な詠み振りとならざるをえなかったともいえる。こうした二重の理由が、「愛の詩人」和泉式部の理解を困難にしているのでないか、寺田氏が何度でも初めからやり直さねばならないといったのも、このような事情によるのでないかと思うのである。

このように、和泉式部の「愛」と「その表現」の秘密の扉は、簡単には開かれないとしても、その歌の詠まれた契機とでも呼びうるものは、詞書や地の文から、ある程度客観的に把握されないこともない。それは何かというと、「つれづれ」ということばによって表わされた、和泉式部の心身の状態がそれである。あえてここに「心身の状態」といったことについては、あとでまたふれることにしたい。

二

さきに、帥宮追慕の歌を七首あげたが、これらはすべて、いわゆる「帥宮挽歌群」のなかに収録されている。帥宮の薨去は寛弘四年十月で、和泉は悲傷のあまり一年の喪に服した。その服喪期間中に詠みつがれた歌が、続集の初めに近い所に、百二十二首ほどまとまってはいっている。まだ十分整理された形態は備えていないが、歌数からいって、優に小歌集を成すに足るものである。この歌群は、五つの歌題で詠まれた「五十首和歌」（実数は四十六首）を、末尾に近く含んでいるが、その「五十首和歌」の詞書は、つぎのようになっている。

つれづれのつきせぬままに、おぼゆることを書きあつめたる歌

にこそ似たれ　ひるしのぶ　ゆふべのながめ　よひのおもひ

よなかのねざめ　あかつきのこひ　これを書きわけたる

（一〇一四―一〇五九）

冒頭の「つれづれのつきせぬままに、おぼゆることを書きあつめたる歌」という叙述から、われわれはすぐに徒然草の序段を連想する。徒然草序段の発想の系譜が、このあたりまではっきりたどれるわけである。この「つれづれのつきせぬままに」のもっと単純化された形としては、徒然草と同じような「つれづれなるままに」という用例が、すでに蜻蛉日記のなかに現われている。和泉式部の作品には、このままの形は見えないが、さきに引用した「帥宮挽歌群」の歌の詞書に、「ならはぬさとのつれづれなるに」というのがあったが、これなど大体、「つれづれなるままに」に近い意味で使われているといってよい。

「つれづれなるままに」は、「つれづれである状態にまかせて」の意味で、末尾の「ままに」は、つぎに何らかの行為を呼び起こすことばである。ここでいうと「書く」という行為があとに来ているが、具体的には「歌を詠むこと」をいう。それでは、そういう行為を呼び起こすことによって、「つれづれ」はどうなるかというと、「つれづれ」が慰められ、まぎらされることになる。その行為は、「詠歌」ばかりでなく、「物語」「音楽」「囲碁」「双六」などであることもある。和泉式部日記によると、帥宮の「御夜歩き」を諫めた侍従の乳母に対して、宮は、「つれづれなれば、はかなきすさびごとするにこそあれ」と弁解していられる。

これらによって、「つれづれ」は、何らかの方法による「なぐさめ」を求めることがわかるが、ぎゃくにいうと、何らかの方法による「なぐさめ」を得なければ、そのままの状態にはたえられない、そのような心情を表わすことばであるといってよい。

この「つれづれ」の意味については、島津久基氏（『国文学の新考察』中の「『つれづれ』の意義」）や土居光知氏（『文学序説』中の「日本文学の展開」）のすぐれた考察があり、私もすでに何度か書いたことがあるが、ここでは、私見の概略を述べるにとどめる。

「つれづれ」は、平安時代になって初めて現われることばであるが、ことに最盛期の女流の作品に頻出する。「つれづれ」の現われてくる作品で、比較的古いのは、管見によると、伊勢物語と古今集とであるが、古今集撰進より数年前に出た『新撰字鏡』を見ると、「儻」の字の意・訓として、「単己独単也、比止利、又豆礼豆礼」としるされている。「儻」の意味は、漢語で表わすと、「単己」「独単」であるが、それに国語を当てると、「比止利」または「豆礼豆礼」となる、というのである。今かりに、「単己」「独単」に「孤独」の語を当てると、ぎゃくに「豆礼豆礼」とは「孤独」の意を表わすも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のとなる。このことは、「つれづれ」の意味を考える場合、重要な方向を示していると思われる。

このように、「新撰字鏡」は、「儻」の訓として、「比止利」と「豆礼豆礼」とを合わせ掲げているが、それならば、「ひとり」と「つれづれ」とは、どんな場合でも同じ意味に使われているかというと、必ずしもそうとはいえないのである。当時の用例にあたってみると、「ひとり」という語は、すでに二とおりの意味で用いられていることがわかる。その一つは、普通に一人・二人・三人という、その「一人」であるが、もう一つは、自分だけが他人から切り離された独立存在であると見る場合で、その際、自分は他のすべての人から拒否ないし疎外されているという、「孤独」の意識を伴うのが特色である。したがって、この方は、前のが客観的認識であるのに対して、主観的心情を表わすものということができる。表記法としては、前者を「一人」と書くのに対して、後者を「独り」と書くのが普通である。『新撰字鏡』にあげられた「比止利」は、後者に相当するわけである。

それならば、「独り」の意味の「ひとり」が、「つれづれ」と全く同じ意味を持っているかというと、これも必ずしもそうとはいえないのである。奈良時代からすでに見えた「独り」の意味の「ひとり」のほかに、平安時代になって、「つれづれ」の発生が見られたのは、「ひとり」では十分表わしえないものが、この時代の現実生活のなかに現われてきたことを意味する。その違いを結論的にいうと、「ひとり」の方は、たとえば、「独り寝るわが衣手」とか、「独りし思へば」とかの慣用句に見られるように、孤独の自己をいだきしめるような精神の緊張が見られるが、「つれづれ」には、むしろ緊張ののちの弛緩の方がつよく感じられ、同時にそれだけ孤独感も深まると見られるのである。『新撰字鏡』に同義語として挙げているのは、その共通点である「単己」「独単」、すなわち「孤独」という中心要素に着眼したものとみてよい。ことばとしては、この二つは以後並行して、それぞれの道を歩むわけである。

ここで具体的な用例に詳しくあたる余猶はないが、簡単にふれておくと、伊勢物語四十五段に、このような話がある。深窓に育った一人の娘が、この物語の主人公の男を恋い慕いながら、意中を打明けることもできず、悶々として日を送るうち、それがもとでとうとう病気になる。そして病気が重くなり、臨終が近づいたとき、はじめて側のものにそのことを告白する。親が驚いて男に知らせてやると、男は慌てふためいて女の所へ来るが、女は間もなく息を引きとる。女に死なれた男は、そのまま女の家にこもっているが、その時の男の「心身の状態」を、「つれづれとこもりをりけり」と言い表わしている。はじめて愛を確認しあった二人の間柄が、女の死により一瞬にして断たれたため、男の衝撃はかえってはげしかったと思われるが、「つれづれ」は、そのような瞬間的な激動の状態をさすのでなく、むしろ、激動ののちの、空虚な時の流れに身をまかせている男の、孤独な心身の状態をさすものとみるべきである。したがってそれは、心身の緊張ののちに訪れる、弛緩ないし放心の状態であるということもできる。

同じ伊勢物語の八十三段にも、「つれづれ」が出てくる。これは、紀名虎の女を母に持つ惟喬親王が、藤原氏に疎外され、鬱勃たる志をいだいて、不遇の日を送っているうちに、同じ思いをいだくグループからも離れて、単身小野の里に遁世庵住する状態をいったものである。この遁世は、直接的には、みずから求めて孤独の道を選んだ場合であるが、それは、ようやく勢威を振いはじめた藤原氏に疎

外されたことが原因となっているわけである。

同じ伊勢物語でも、さきの四十五段が、一対一の恋愛関係にあった男女の一方が死んだ場合の、いわば個人的な契機によるものであるのに対して、この段は、そこに社会的・政治的な契機が考えられる点が異なっているのであるが、結果からいうと、他から切り離された一人の男の、孤独な心身の状態をさす点は、さきの段と同じである。

源流時代の「つれづれ」は、大体このような意味で用いられているといってよい。私は、これまでたびたび、「つれづれ」の基本的な意義は、「孤独な心身の状態」であるといったが、これを主観的・内省的な立場から捉えると、「孤独感」ということになる。この「孤独感」は何に根ざしているかということについて、故斯波六郎先生は、人は皆動物的な生命の不安感を心の奥に蔵していて、それがもとで「孤独」を感ずるのでないか、といっていられる（『中国文学における孤独感』）。もしそうだとすると、「つれづれ」のままの状態の持続は、たえず深淵に臨む思いにおびやかされることになる。何らかの方法でそれを慰めまぎらすことが要請される理由も、ここにある。

「つれづれ」は、平安文化の上昇期から爛熟期にかけて、特に女性の作品に頻繁に現われることについては、さきにいった。最初は個人的な心情を表わす語であった「つれづれ」が、一種の倦怠感（アンニュイ）として、おしなべて多感な平安人の胸に、ひろく浸潤してゆくのであるが、中心の意義は一貫して変わらなかったようである。

三

以上のことからいって、「帥宮挽歌群」の詞書に「つれづれ」の語がたびたび現われ、おのずからにそれらの歌の発想契機を語っていることも、当然といってよい。この「挽歌群」に見られる和泉式部の「つれづれ」は、愛によって結ばれていた二人の連帯が、帥宮の薨去を境として断たれ、自分だけがこの世に取り残されたところから生まれたものであることは、明らかであるが、帥宮との愛の交渉の顚末を書き綴った和泉式部日記のなかにも、頻繁に「つれづれ」の語が現われるのは、どう解すべきであろうか。帥宮と和泉式部との交渉がはじまって間もないころの記事に、つぎの一節がある。

たまはせそめては、また、

うちいでてもありにしものを中々にくるしきまでもなげくけふかな

とのたまはせたり。もともこころふかからぬ人にて、ならはぬつれづれのわりなくおぼゆるに、はかなきこともめとどまりて、御返、

けふのまの心にかへておもひやれながめつつのみすぐす心を

かくてしばしばのたまはする、御返も時々きこえさす。つれづれもすこしなぐさむ心ちしてすぐす。

帥宮からは相ついで愛の歌が贈られてくる。その歌が、ここでは「はかなきこと」といわれている。他の個所でも、歌がしばしば「はかなきこと」ないし「はかなしごと」といわれていることに気づく。「はかなきこと」とは、わずか三十一音の短小な詩型としての「歌」という意味であるが、同時に、「まめごと」に対する「あだごと」と同じように、大きくは一国の政治・経済から、小さくは一家の生計などもこめた、実用的なことに対して、文学・芸能など、所詮は「遊び」としか見られないことをさす。しかし、そういう「は

かなきこと」である「歌」が、「つれづれ」をなぐさめる働きを持っているわけである。「ならはぬつれづれ」とは、弾正宮に死別し、「ゆめよりもはかなき世の中をなげきわびつつあかしくら」している和泉式部が、はじめて感じた「つれづれ」をいう。同時に、この「つれづれ」は、弾正宮との恋愛事件がもとで、夫道貞とも離別し、冷たい世評をうけたばかりでなく、親からも勘当され、家族からも世間からも隔絶した所で感じている「つれづれ」である。「ならはぬ」とは、このような条件によって感ずる「つれづれ」が、最初の経験であることを意味する。

ともあれ、「つれづれ」は、何らかの方法によってなぐさめ、まぎらされることを、それ自体が要求する。このような「つれづれ」をわりなく思っているとき、帥宮から贈られた歌は、たといそれが「はかなきこと」であったとしても、心ひかれて、すぐさま御返しの歌を贈るのであるが、このように歌の贈答が度重なるにつれて、「つれづれもすこしなぐさむ心地してすぐす」ということになるわけである。

つぎに掲げるのは、帥宮との交渉がはじまって半月ほど経ったころの記事である。

雨うちふりて、いとつれづれなる日比、女はくもまなきながめに、世のなかをいかになりぬるならんとつきせずながめて、すきごとする人々はあまたあれど、ただいまはともかくもおもはぬを、世の人はさまざまにいふめれど、「身のあればこそ」とおもひてすぐす。宮より、「雨のつれづれはいかに」とて、

おほかたにさみだるるとやおもふらん君こひわたるけふのながめを

とあれば、をりをすぐし給はぬををかしと思ふ。あはれなるをりしも、と思ひて、

しのぶらんものともしらでおのがただ身をしる雨とおもひけるかな

とかきて、紙のひとへをひきかへして、

ふればよのいとどうさのみしらるるにけふのながめに水まさらなん

まちとるきしや」ときこえたるを御覧じて、たちかへり、

なにせんに身をさへすてんと思ふらんあめのしたには君のみやふる

たれもうき世をや」とあり。

和泉式部の、故弾正宮に引かれる気持は簡単には整理されないままでいる。また、そのころすでに仲が絶えていたと思われる夫道貞への思慕の情も、断ちがたい状態がつづいている。といって、帥宮との関係が、今後どうなるとも知れない不安が、一方にはある。そこへ、新たに言い寄る別の男もあり、それにつれてまた冷たい世評も立つ、という有様である。このような不安定な所に身をおいた女主人公（つまり和泉式部）が、折から五月雨の降りつづくころで、文字通り「つれづれのながめ」に明けくれている。――初めの三分の一にあたる部分の叙述は、このような内容のものである。

そこへ、「雨のつれづれはいかに」という前書きとともに、「おほかたに」の歌が贈られてくる。それを受けとった和泉は、「をりをすぐし給はぬををかしと思ふ」といっている。「をり」とは、和泉自身が今「あはれ」を感じている、その「をり」である。そして「をりをすぐし給はぬ」というのは、和泉自身で「あはれ」を感じている、その「をり」を知って、その「をり」にふさわしい歌を、機を逸せず詠んでよこされたことをいう。和泉の立場からいうと、

自分の心中を見すかされたときの、「的中の感」とでも呼ぶことのできそうな感情が、「をかし」という評語となってあらわれたのである。

この消息を受けとった瞬間、和泉の「つれづれ」がまぎらされたばかりでなく、歌心が誘発されて、一重の紙を裏返してまで、返歌を二首も連作することになる。この二首目の「ふればよの」の歌の意味は、「世にながらえておりますと、いよいよ人の世のつらさが思い知られますので、いっそ水に溺れて死んでしまいたい、ですから、今日の長雨で水かさが増してくれればよいと思います」というのである。後書きの「まちとるきしや」は、水かさが増して、私を待ちとってくれる岸がどこかにあればよい、の意で、そこにははっきりと、「彼岸」を思う心が現われている。初めの散文の部分に見える「身のあればこそ」の句は、拾遺集恋五に入る「いづ方にゆきかくれなむ世の中に身のあればこそ人もつらけれ」（読人しらず）などに拠ったものであろうか。この歌は、世間の冷やかな中傷も、わが身がこの世にあればこそだから、そういう中傷の聞えて来ない所に姿をかくしたい、という意味を持つ。女の内部に、はっきりと厭離穢土の心が動いたことを語るものであろう。

これに対して、帥宮から贈られた「なにせんに」の歌は、女から返された二首の内、あとの歌の下句とその添え書きに託された心を読みとったうえで詠まれたもので、どうして自分を捨てようとまで思いつめるのですか、この世で悲しみに沈んで生きているのは、そなたばかりではない、という意味のものである。そしてこの歌の結句は、添え書きの「たれもうき世をや」へすぐつづく心持で、「思うにまかせぬ世を悲しむのは、そなたばかりではない、わたしも同様だ」の意を表わしている。ここにはっきりと、「連帯感」ないし「連帯意識」と呼んでいいもの（木村正中氏が「和泉式部日記の特質」（『日本文学』一九六三・二）で「共感性」といい、寺田透氏が「『和泉式部日記』序」で「共通感情」と呼んでいられるのも、大体同じ意味と思われる）が現われていることに、注目したいと思う。

帥宮の「をり」をすぐさぬ歌や詞によって誘発された和泉の歌や詞が、これまで二人の間に潜在していた連帯意識を表面に浮きあがらせる契機となったのである。この意識は、実は帥宮と和泉との間に恋歌がスムーズに取り交されるための心理的基盤となるものであるが、和泉式部日記を、少し念入りに読んでゆくと、「たれもうき世」の意識が、この作品の底流として一貫していることを知るのである。

「たれもうき世」の意識は、いわば孤独な魂と魂との間の連帯の意識である。ここでいうと、「つれづれ」を「わりなく」思いつづけている帥宮と和泉とが、たがいに相手を思いやり合う心をさす。帥宮と和泉との間に、恋歌の贈答がスムーズに進行させられるためには、この連帯意識が心理的基盤として必須の条件であることは、さきにいったが、なおそのうえに、二人の間の才藻（歌才）の均衡と、折すぐさぬ詠出という二つの条件が加わらねばならない。帥宮と和泉との場合には、この三つの条件が理想的に備わっていたことを知るのである。

和泉式部には、少女時代に、性空上人にあてて魂の救いを求める歌を送って以来、「彼岸」への心の傾きがつづいていたことが、歌集や日記によって知られるが、そういう心の傾きにたえて、けっきょくはつかの間の夢である恋に身をゆだねるほかなかった。そして恋は夢と知りつつも、その刹那の真実しか、もはや信じうるものはない、と思っていたようである。その恋の対象がつぎつぎと変わっ

ていったのも、理由あることである。しかし、それらの恋人群のなかで、帥宮にとりわけ激しい恋情を燃やすに至ったとすると、それは、和泉式部にとって、帥宮が恋の相手として、また対詠の相手として、その資格に欠ける所のない方であったからである。それは、二人の間に恋歌の贈答がスムーズに進行させられるための、あらゆる条件が理想的に備わっていたことを意味する。和泉式部は、このような詠歌条件のもとに、きわめてユニークな文学世界を生成したのである。言いかえると、「たれもうき世」の連帯意識を共通の心理的基盤とし、詠歌主体の才藻の均衡による対詠の「場」が、帥宮との間に完全に成り立っていたこと、さらに対詠行為を活発化するために、二人の間に取り交される歌の一首一首が、「をり」を知って詠出されたこと、これらの条件を具備することによって、「愛の詩人」和泉式部の文学世界が、そのまさにあるべき極限に達したのである。このことは、具体的には、和泉式部日記の表象を忠実にたどることから、さらにさかのぼっては、帥宮を喪ったのちの和泉式部の心のありようを、「帥宮挽歌群」のなかに探ることから、おのずからに了解されるであろう。そういう和泉式部自身が、記念碑を刻む思いで、帥宮との恋愛の顚末を、『和泉式部日記』として文字化することも、きわめて自然のことのように思われてくるのである。

〔付記〕和泉式部歌集抄出の歌に付した番号は、すべて岩波文庫本のそれによった。

（「文学・語学」第三七号　昭和四〇年九月発行）

和泉式部物語

今井卓爾

一

『和泉式部物語』はある女―和泉式部（生歿未詳）が帥宮敦道親王（九六一―一〇〇四）と恋を語りはじめ、それが成立して遂に宮の邸に引きとられ、そのために宮の北の方は居たゝまれず里に帰る事を描いてゐる（一〇〇三―一〇〇四）。この作品には二つの名称―『和泉式部物語』（古写本・刊本・『扶桑拾葉集』）と『和泉式部日記』（『本朝書籍目録』・『群書一覧』・『群書類従』）とがある。どちらが原名であるのか不明であるが、何れにしても和泉式部を主人公にした作品といふ意味であると思ふ。この作品が何時書かれたのであるかは分らない。和泉式部が敦道親王と恋を語つたのは清少納言や紫式部のゐた頃の事である。此事件の描かれる様になつたのは、多分事件後若干の時間の経過した時であると考へてよいから、平安時代の中期から後期にかけての作品ではないかと考へられる。今の所この作品の成立事情を明白にするだけの材料がないから、かういふ推定のみに止めておく事にする。

二

『和泉式部物語』の著作態度は日記と言はれる他の作品に比較するとかなり大きな差異がある。他の日記と言はれるものは殆んど凡て作中の人物―主人公即ち日記の著者で、其主人公の目から見た記事のみをのせてゐるのであるが、『和泉式部物語』には、主人公の観点に対するさういふ統一が欠けてゐる。主人公である和泉式部の目から見た世界のみが描かれてゐない。例へば、

日頃のおこなひに苦しうて、うちまどろみたる程に、門たゝくを聞き咎むる人もなし。聞し召す事もあれば、人などのあるにやと思し召して、やをら帰らせ給ひぬ。

帥宮が式部を尋ねて来たが戸をあけなかつたのでかへつてしまつたといふだけの事であるが、「聞き咎むる人もなし。」までは式部の立場として書いてゐるとされるが、「聞し召す事もあれば、」と相手帥宮の方が主となり、その次には宮の心を推量した言葉が見えてゐる。宮が全くの客観的存在であつて、自己といふ主観の立場が示されてゐない。即ち前半の主人公は式部であり、後半の主人公は帥宮

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com